

## 造影 CT 三次元表示法が術前診断に 有用であった盲腸捻転の 2 例

まつ うら ふみ な<sup>1)</sup> むく もと ひで みつ<sup>1)</sup> かじ やすし<sup>2)</sup>  
松 浦 史 奈<sup>1)</sup> 棕 本 英 光<sup>1)</sup> 楫 靖<sup>2)</sup>  
うえ じま ち ひろ<sup>3)</sup> はっ とり しん じ<sup>3)</sup>  
植 嶋 千 尋<sup>3)</sup> 服 部 晋 司<sup>3)</sup>

キーワード：盲腸捻転，マルチスライス CT，多断面再構成像，ボリュームレンダリング像

### 要 旨

症例 1 は91歳男性で，右下腹部痛を主訴に救急外来を受診。造影 CT にて右下腹部で回結腸動脈を含む whirl sign を認め，頭側に拡張した盲腸～上行結腸を認めたことより盲腸捻転 type II (loop type) と診断した。症例 2 は82歳女性で，腹部膨満感と嘔吐を主訴に救急外来を受診。造影 CT にて腹部正中に回結腸動脈を含む whirl sign を認め，骨盤内にて盲腸は著明に拡張しており，盲腸捻転 type I (axial type) と診断した。両症例とも受診日に緊急手術となり，盲腸捻転に対して回盲部切除術が施行された。造影 CT の三次元表示法である多断面再構成像やボリュームレンダリング像により，血管や腸管の走行について詳細な観察が可能となり，術前の段階で盲腸捻転を強く疑うことができた。

盲腸捻転は捻転様式によって容易に腸管虚血や壊死に陥る疾患であるが，症状は非特異的であるため，造影 CT を基本とした正確かつ迅速な画像診断が重要と考えられる。

### 緒 言

盲腸捻転は比較的稀な疾患で，捻転様式により容易に腸管虚血を生じ時に壊死に陥るが，術前診断が困難であることが多いとされる。疾患特異的な症状や血液検査所見に乏しく，高齢者や先天異常・脳性麻痺・精神発達遅滞などの基礎疾患を有

する症例では詳細な病歴を徴取しにくいこともあり，画像診断が担う役割は大きい。特にマルチスライス CT を用いた造影検査時には，三次元表示法である多断面再構成像 (multi-planar reconstruction : MPR) やボリュームレンダリング像 (volume rendering: VR) 等の有用性が高い。本報告では造影CTのMPR像やVR像により盲腸捻転を正診できた2症例の画像を提示し，過去の文献とあわせて診断のポイントを再確認する。

Fumina MATSUURA et al.

1) 益田赤十字病院放射線科

2) 島根大学医学部放射線医学講座

3) 益田赤十字病院外科

連絡先：〒698-8501 島根県益田市乙吉町イ103-1

益田赤十字病院放射線科